

## &lt;研究ノート&gt;

歴史社会言語学の（再）構想  
 Perspectives on Japanese Historical Sociolinguistics

しづや かつみ (大阪大学)  
 渋谷 勝己 (大阪大学)

キーワード：歴史社会言語学、日本語史

## 1. はじめに

1990年10月14日、国立民族学博物館で開催された社会言語学ワークショップにおいて、<sup>敬</sup>宮治弘明さん（当時大阪大学助手）、ダニエル・ロングさん（同大阪大学大学院学生）を無理矢理さそって、「歴史社会言語学の可能性」と題して発表したことがある。この社会言語学ワークショップは、1987年から1997年にかけて、日本言語学会の大会が終わったあとの夕方に、同じ場所で開催していたものである。

「歴史社会言語学」という分野は、現在ではすでに十分な市民権を得て、Historical Sociolinguistics Network (<http://www.philhist.uni-augsburg.de/hison/>) といった組織が設けられ、Historical Sociolinguistics: Studies on Language and Society in the Past (Peter Lang)、Advances in Historical Sociolinguistics (John Benjamins) のようなシリーズのほか、Hernández-Campoy & Conde-Silvestre (2012) *The Handbook of Historical Sociolinguistics* (以下 HC & CS と略記) などのハンドブックも出版されるにいたっているが、当時、「歴史」と「社会」を同時に主タイトルにもつ言語学関係の本は、Romaine (1983) *Socio-historical Linguistics: Its status and methodology* など、ごく限られていた。

なお、この分野の名称については、historical sociolinguistics のほか、上の Romaine の著書や、Trudgill (2010) *Investigations in Sociohistorical Linguistics: Stories of colonisation and contact*、HC & CS 所収の David Britain 'Innovation diffusion in sociohistorical linguistics' のように、socio(-)historical linguistics を用いるものがある（ただし Trudgill や Britain の本文中では、'historical sociolinguistic(s)' といったことばも使われている。筆者（渋谷）自身は、この分野を考えるとときには、歴史言語学ではなく社会言語学に基盤をおいているので、「歴史社会言語学」という名称を採用する。

本稿では、この歴史社会言語学という研究分野について、1990年当時に筆者らが考えていたことと(2節)、近年出版された HC & CS が取り上げたテーマを対照しつつ(3節)、今後、日本語を対象としたときに、この分野が展開していくべき方向を、あらためて検討することを試みる(4節)。

## 2. 渋谷・宮治・ロング（1990）の概要

発表の時の順序とは若干異なるが、本稿の出発点として、まず、渋谷・宮治・ロング（1990）の概要を、発表の背景と目的（2.1）と、日本語史研究における歴史社会言語学的研究（2.2）の、2つの項目のもとにまとめておこう。なお、各項の内容については、発表時のものに若干の加除を行った。

### 2.1 発表の背景と目的

1990年という時期は、日本の社会言語学界では、Labovの変異理論やHymesのことばの民族誌、Fishmanの言語社会学などをはじめとする、欧米で発展して日本に移入された社会言語学（欧米派）と、国立国語研究所の一連の共通語化調査や大都市調査のような、国内で成立した社会言語学（日本派）の、二つの流れがまだ対立的に捉えられていた時期であった。その止揚を図ることを目的として、日本言語学会において「社会言語学の理論と方法—日本と欧米のアプローチ—」といったシンポジウムが開催された時期である（1987年第94回。登壇者は、日本派が杉戸清樹・荻野綱男・徳川宗賢・井上史雄、欧米派が津田葵・日比谷潤子・国広哲也・井出祥子。『言語研究』94、1988に報告）。

この時期はまた、日本の社会言語学研究においては、欧米派にせよ日本派にせよ、過去の日本語はまだその対象には入っておらず、一方、それまで蓄積されてきた日本語史研究のなかには、社会言語学研究とは銘打っていないものの、類似の手法によってなされた研究が数多くある、そんな時期でもあった。

渋谷・宮治・ロング（1990）は、以上のような状況をふまえて、一方では欧米派と日本派の社会言語学を融合させ、また一方では社会言語学研究と日本語史研究を融合させることを試みたものである。ただし、筆者らは当時から、欧米派と日本派という区分はあまり意識しておらず、焦点はもっぱら、社会言語学と日本語史研究をいかに融合させるかということにおいていた。具体的には次のことを目的としている。

- (a) これまで行われてきた日本語史研究のなかで、社会言語学が注目するような言語事象がどのように扱われてきたかを振り返る（これは、筆者らが、出発点において社会言語学の立場に立っていることによる）。
- (b) 過去の日本語を対象とする、歴史社会言語学という新たな分野を構想する。

そして、歴史社会言語学を定義して、次のように述べる。すなわち、歴史社会言語学とは、社会言語学的手法を過去のことばにも適用し、次のことを行う研究分野である。

- (1) バリエーションの歴史社会言語学：社会的要因を加味した各時代語の体系記述と、その通時的な変化の記述を行う。
- (2) 言語行動の歴史社会言語学：各時代語における言語行動の記述と、その通時的な変化の記述を行う
- (3) (1) (2) に関する「なぜ」（歴史）を追究する。

その他、この項ではあげていないが、各時代に行われた言語計画やその歴史を考えることも、この分野の課題としている（次項参照）。

## 2.2 日本語史研究における歴史社会言語学的研究

さて、渋谷・宮治・ロング（1990）が次に行ったのは、これまでの日本語史（国語史）研究が行ってきた社会言語学的な研究を整理することである。歴史社会言語学の課題を上のように設定したとき、それまで日本で行われてきた日本語史研究のなかには、すでに多くの蓄積があった。たとえば、次のような研究である（各項の事例は、他の項に分類できる場合もある。それぞれの研究を行った文献の記載は省略する）。

### (a) 共時的研究

(a-1) 地域的／超地域的（共通語）変種の記述：上代から江戸中期までの中央語以外の方言（とくに東国方言）、江戸後期の上方語と江戸語の相違、など

(a-2) 社会方言の記述：位相語（武士ことば・斎宮忌詞・奴ことばなど）、性差（女房ことばなど）、階層差（江戸語の武士変種・町人変種など）、など

(a-3) スタイルの記述：文体（漢文訓読体・和文体など）、ジャンル・目的による変種（抄物のことば、講義のことばなど）、口語性（会話文・心内文・地の文）、被言及者・聞き手・聴衆によることばの変種（敬語など）、など

(a-4) 言語計画：定家仮名遣い、明治の言語政策、など

### (b) 通時的研究

(b-1) 言語変化の過程で観察されるバリエーション（ゆれ）の研究

(b-2) 言語接触とことばの変容：漢語・外来語の借用と日本語の変容、和漢混淆体の成立、欧文による影響、など

(b-3) その他：国語意識史、言語生活史、言語政策史、など

このうち (b-1) からひとつだけ例をあげれば、たとえば、二段動詞から一段動詞への変化については、坂梨（1970）や山内（1972）などによって、次のような要因が制約条件として働いていることが指摘されている（不等号の左側が一段活用化しやすい要因）。

#### A. 言語内の制約条件

動詞＞助動詞                      上二段＞下二段

終止連体形＞已然形              三音節語＞四音節語

ルル語尾を有さない動詞＞有する動詞（忘ルルなど）

#### B. 言語外的制約条件

話者の属性：庶民＞武士      女子＞男子      教養の低い者＞教養の高い者

聞き手      ：目下の者・親しい者＞目上の者

スタイル    ：会話文＞地の文    うちとけた時＞あらたまった時

喜怒哀楽の情の激しい時＞落ち着いた時

このような、バリエーション（この場合二段動詞形と一段動詞形）を言語内外の制約条件によって整理し、言語変化のプロセスを捉えようとする分析の方法は、変異理論のそれと重なっている。

### 3. Hernández-Campoy & Conde-Silvestre (2012) のキーテーマ

次に、近年刊行された歴史社会言語学のハンドブックである HC & CS の各パートからキーテーマを拾うことによって、現在、欧米で展開されている歴史社会言語学の研究がどのような視点をもって何を研究対象にしているかを整理してみよう。次のようになる（カッコ内はそのパートを構成する論文数）。

#### Part 1 Origins and Theoretical Assumptions (3)

共時態と通時態、歴史社会言語学の起源・動機・パラダイム、社会史と言語の社会学

#### Part 2 Methods for the Sociolinguistic Study of the History of Languages (8)

量的パラダイムの適用、均一性仮説、コーパスの使用、文献が書かれた社会コンテキストに配慮した資料の編集、資料（医療文書・公文書・修道院関係文書、私信・日記類、文芸作品、広告・新聞）

#### Part 3 Linguistic and Socio-demographic Variables (8)

言語変項（正書法・音声・文法・語彙意味・語用）、属性（階層・年齢・性・民族・エスニシティ・宗教・カースト）、社会ネットワークと流動性

#### Part 4 Historical Dialectology, Language Contact, Change, and Diffusion (11)

変化の目的論、外的変化と内的変化、語彙伝播、変化のタイミング、伝播、方言の再構における変項としての空間、言語地図集、歴史社会言語学的再構、多言語併用・コードスイッチ・言語接触、移住と言語変容、世界の言語の分岐と収束

#### Part 5 Attitudes to Language (5)

イデオロギー、言語の神話、言語の純化、威信パターンの再構、中世・ルネサンス期の書かれた日常語（written vernacular）

ここであげられたキーテーマを、渋谷・宮治・ロング（1990）があげたところ（2.2 節）と対照し、その異同を整理すれば、次のようになるだろう。

- ・両者のあいだには共通するところが多いが、一方では次のような違いもある。
- ・渋谷・宮治・ロングの武士ことばや女房ことば、HC & CS の中世・ルネサンス期の書かれた日常語など、個別文化的な言語事象を反映した項がある。
- ・渋谷・宮治・ロングには、HC & CS の Part 1 に相当するキーテーマがない。これは、渋谷・宮治・ロングでは分析の対象とした言語事象を中心に整理したからであり、これまで行われてきた日本語史研究のなかにそのような研究がないということの意味しているわけではない。たとえば「共時態と通時態」の問題については夙に亀井（1935）などが正面から取り上げている。

- ・渋谷・宮治・ロングには、HC & CS の Part 2 に相当するキーテーマが少ない。量的パラダイムや均一性仮説など一定の理論と結びついた点や、コーパスなどの当時の技術的状况を反映したところを除けば、これも上と同じ理由による。分析に使用する個々の資料については、日本語史研究のなかでも詳細な吟味が加えられ、それが作成された社会的なコンテキストについても十分な注意が払われてきたところである。また、当時はほとんどなかった日本語の歴史的なコーパスも、国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」や国文学研究資料館のデータベースなどが整備され、広くアクセス可能なかたちで提供されている。
- ・逆に、渋谷・宮治・ロングがあげた (a-3) の敬語史研究や (b-3) の言語生活史研究は、日本語の特徴や日本で行われた研究の視点を反映して、日本で独自に行われてきたところで、日本の研究が歴史社会言語学の発展に貢献できるところである。

以上のように整理してみると、現在、欧米で行われている歴史社会言語学の研究は、渋谷・宮治・ロング (1990) が構想したのと同じ方向に展開しており、日本で行われてきた日本語史研究との距離はそれほど大きいものではないことがわかる。後者が社会言語学のもつ視点や立場を共有すれば、すぐに連携できる段階にある。

#### 4. 今後の展望

以上、渋谷・宮治・ロング (1990) と HC & CS の取り上げたキーテーマを整理、対照することによって、日本語史研究と欧米の歴史社会言語学とが、実は、同じような視点で同じような対象を分析してきたこと、両分野はすぐに連携できること、の2点を確認した。最後に、日本語について歴史社会言語学的な研究を行ううえでの、今後の課題を整理してみよう。先に、渋谷・宮治・ロング (1990) で指摘し、現在もまだ課題として残るところを含めてまとめると、たとえば次のような課題がある。

##### (a) 資料的限界

ことばの歴史的な研究においては避けられないところであるが、記録に残されたことばには、地域方言、社会方言、スタイルのいずれの面においても偏りがある。日本語については基本的に、都市部（上方や江戸）の教養層の書きことばに偏っていて、たとえば文献が豊富な平安朝の京都のことばでも、庶民のことばなどは探りにくい。

また、多くの文献は一人ないし少数の著者が書いているために、文献中に観察される地域方言や社会方言は、その著者の思い込み、あるいはステレオタイプである役割語（金水 2003）が交じり、必ずしも実態を反映しているとはいえないところがある。

以上は、歴史社会言語学的な研究を行う上で常に留意することが必要なところである。

##### (b) スタイルの総体的な記述の欠如

日本語史研究においては、どちらかといえば各時代語の口語の記述や、その通時的な変化の解明が中心的な課題となってきた。また、文語が取り上げられる場合にも、口語と対比される場合があるものの、文語に限定しての分析が多い。各時代語について、その文体やスタイルの総合的

な分析、すなわち、ある特定の共同体では総体としてどのようなスタイルが使用されていたのかという視点での分析が不足していた。また、一人の著者が複数のジャンルで作品を残しているような場合には、渋谷（1998）が漱石について試みたような、その著者のジャンル間でのスタイル切り換え、マルチスタイル能力者（multistylistic）としての著者といった視点での分析も可能だったはずである。

(c) 日本語史研究における「文体」という概念の不透明さ

関連して、そもそも、日本語史研究でよく使用される「文体」という概念やその認定基準にはいくつかのタイプがあり、それぞれにまた不透明なところがある。たとえば次のような規定である（実際には、以下のうちの複数の基準が混在するケースが多い）。

- (1) 「平家物語の文体」「漱石の文体」のように、文体とはひとつの作品やひとりの作家が（ひとつ）もつとするもの。
- (2) 「仮名文体」「漢文訓読体」「抄物体」のように、使用された文字の種類や、読み下された漢文作品の有無、作品のジャンルなど、おもにことば以外の要因によって設定されたもの。
- (3) 「和漢混淆体」「候文体」のように、ある作品や資料のなかに見出される（いくつかの）言語要素・言語変異等に基づいて、ごくおおまかに分類されたもの。

これらの基準は、(3) をのぞけば、いずれも、先に言語外の要因にもとづいて文体を認定し、そのあとで作品ごとのことばの性格を分析するという手法を採ることが多い。このことは、Labovらの「スタイル」（ことばへの注意度の程度）についても同じである。これに対して、

- ・樺島・寿岳（1965）や Biber（1988）のように、各作品で実際に用いられていることばから帰納して（連続体としての）文体というものを認定する、あるいは、
- ・各作品のなかで使用されることばの種類に基づいて、それぞれの作品をその時代の文体のレンジ全体のなか位置づけていく
- ・こういった作業のなかから、文体についてのいくつかの類型を見出していく

といった、ことばを出発点とする分析方法があってもよい。たとえば、同じ和漢混淆体といわれるものでも、『今昔物語集』（の各部）や『方丈記』、『平家物語』などでは用いられることば（和漢の混交の比率など）に違いがあることが指摘されているが、このような相対的な違いを明確にする作業を、個々の言語変項についてより精密に行っていくといった方法である。

(d) これまでの研究に欠如する視点

日本語史研究において採用する分析方法には、大きくわけて、①個別の言語形式の意味記述や、その形式・意味の変化を扱うものと、②ある意味領域を担う複数の形式が構成する体系や、ひとつの文法カテゴリを取り上げて、その体系を記述したり、その通時的な変化を追うものがある。①のうち、意味を固定して、その意味を担う形式がどのようなバリエーションをもち、それがどのような言語内外の制約条件に左右されて使用／伝播されるのか、といった研究は、Labovの変異理論などと同じ立場をとった研究であり、社会言語学との連携が即座に可能なところである（先の一段活用化の例参照）。しかし、次のような点については、かならずしもその視点が十分に確立

してはいない。

(d-1) 文法化を進める社会的要因への視点

①のうち特定の文法形式の変化を扱うものや、②の文法カテゴリを取り上げる研究は、ある形式がより文法的な性格を強めていくとともに、もとの文法的な意味を表すのにそれまで語彙的な形式だったものが新たに採用されるといった、文法化の視点での研究が多かった。このタイプの研究は認知言語学が興味をもつもので、この分野では、たとえば文法化を進めるのはどのような属性をもつ人たちか、あるいはどのような場面で進められるのか、といった、社会言語学的な問題意識をもつことはあまりなかった。

(d-2) 言語行動への視点

また、日本語史研究においては、言語行動を対象とする研究も、敬語研究などを除けばほとんどなされていない。データを集めることの困難は予想されるが、たとえば、

- ・講義・説教談話の構造
- ・愛の気持ちを打ち明ける言語行動（以上、前田 1983 のアイディアによる）
- ・依頼・断り・不同意・ほめなどの発話行為

の記述とその史的変遷過程の解明など、現代の言語行動研究、とくに発話行為論やポライトネス理論と連携できるところが多いはずである。

(e) 変化の説明（歴史）の問題

ことばの変化を説明する要因には、①生理的要因、②認知的要因、③社会的な要因などがある（渋谷 2008）。歴史社会言語学が興味をもつのは、③の社会的な要因である。

日本語史研究のなかで言語変化の社会的な要因を追究することは、目新しいことではない。時枝（1949）の言語生活史研究や、日本語の通史を描いた亀井・大藤・山田編（1963-1966）は、言語や言語変化と社会の関係を随所で指摘している。しかし、その後は、社会的な要因を前面に押し出しての、言語変化のメカニズムをめぐる活発な議論が展開されるまでにはいたらなかったように思われる。その原因には、①議論のための何らかの社会言語学的な枠組みが欠落していたこと、②関連して、社会的要因というときの「社会」の概念があまりにも漠然としていたこと、③言語と社会を直接（因果関係として）結びつけて論じることが困難であること、などが考えられよう。

渋谷・宮治・ロング（1990）では、この面からする具体的な研究事例として、次の2つの事象を取り上げた。

- (1) 京都市方言と大阪市方言の存在表現「オル」に見出される用法の違いは、両都市の人口の流入のあり方の違いと連動するか。
  - (2) 日本語の可能表現・尊敬表現は、助動詞ル・ラルやナルなどの自発（的）表現を起源とすることが多いが（大野 1967）、日本には、そのような変化を引き起こす文化的な土壌（大野のことばでは「日本人の根深い思考法」）があるのか。
- (1) については、Milroy & Milroy（1985）の、言語変化と社会構造との関係についての仮説、

すなわち、集団が安定し、そこに強い結びつきが存在するときには言語変化は遅く、集団の結びつきが弱くなると変化は急激に進行するという仮説を採用しつつ、大阪市方言における「オル」の待遇的意味の変化（もともと京都市方言のように下向きの待遇を表したものが、中立的な待遇を表すようになる変化。「敬意逡減の法則」の例外となる）は、比較的最近進行した急激な変化の一例であり、大阪市における急激な人口増加、とくに、「オル」を待遇的に中立の表現として用いる西日本出身者の流入が、大阪市での言語変化を引き起こした可能性がある」と指摘した（宮治の研究による）。

(2) については、その後渋谷（1993）で議論したので、ここでは省略する。

いずれにしても、言語変化は、その言語が使用される共同体がもつ社会的な要因によって引き起こされることがあるのはまちがいない。ただし、そのような特徴が実際の言語変化にどのように作用したのかということをつまらぬにすることは容易ではない。渋谷・宮治・ロング（1990）では、「現段階では、類似するメカニズムによって起こった変化を多く集めることが必要である」と述べたが、その主張はいまでも変わりが無い。言語変化をもたらす社会的な要因は、ことばのさまざまな側面に同時に働くはずであり、同じ要因によって説明できる類似の変化事象を広く探していくことが大事になる。

#### (f) 独自の研究の模索

最後に、歴史社会言語学という分野が、社会言語学の「既存の方法を」、過去のことばという「新たなデータに適用する」だけのものでは物足りない。社会言語学の方法を過去のことばに適用することによって、方法自体がより洗練されるとともに、現代語だけを見てはわからないことばの社会的な性質が解明されるということが、歴史社会言語学という分野を新たに設ける意義としてもっとも重要なことである。

## 5. まとめ

以上、本稿では、渋谷・宮治・ロング（1990）の構想する歴史社会言語学を出発点とし（2.1節）、これまで日本語史研究が行ってきた研究と（2.2節）、HC & CS のあげるキーテーマを比較することによって、両者を連携させることが可能かつ必要であることをあらためて主張した（3節）。また最後の4節では、そのような連携のなかで取り組むべき課題について整理した。

この分野を構想するにいたったきっかけは、筆者が東京外国語大学の大学院生だったときにいただいた井上史雄先生のご指導のなかにある。その学恩に、あらためてお礼を申し上げたい。

\* 本稿は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「江戸後期の著作者を対象とするスタイル能力の歴史社会言語学的研究」（2013～2015年度、課題番号 25370516、研究代表者 渋谷勝己）の研究成果の一部である。

## 〔引用文献〕

- 大野晋 (1967) 「日本人の思考と日本語」『文学』35-12
- 樺島忠夫・寿岳章子 (1965) 『文体の科学』綜芸舎
- 亀井孝 (1935) 「文法体系とその歴史性—国文法記述に対する一寄与として—」『国語と国文学』13-10 (『亀井孝論文集 1 日本語学のために』吉川弘文館、1971 再録)
- 亀井孝・大藤時彦・山田俊雄編 (1963-1966) 『日本語の歴史』1~7・別巻、平凡社 (平凡社ライブラリー『日本語の歴史』2006~2008 として再版)
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 坂梨隆三 (1970) 「近松世話物における二段活用と一段活用」『国語と国文学』47-10
- 渋谷勝己・宮治弘明・ロング ダニエル (1990) 「歴史社会言語学の可能性」『社会言語学ワークショップ』ハンドアウト (1990.10.14、国立民族学博物館)
- 渋谷勝己 (1998) 「漱石のスタイルシフト」『待兼山論叢 日本学篇』大阪大学文学会
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1
- 渋谷勝己 (2008) 「第 4 章 新たなことばが生まれる場」『シリーズ日本語史 4 日本語史のインタフェース』岩波書店
- 時枝誠記 (1949) 「国語史研究の一構想 (上) (下)」『国語と国文学』26-10・11
- 前田富祺 (1983) 「言語行動史の可能性」『日本語学』2-7
- 山内洋一郎 (1972) 「院政鎌倉時代における二段活用の一段化」『国語学』88
- Biber, Douglas (1988) *Variation across Speech and Writing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hernández-Campoy, Juan Manuel and Juan Camilo Conde-Silvestre (eds.) (2012) *The Handbook of Historical Sociolinguistics*. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Milroy, James and Lesley Milroy (1985) Language change, social network and speaker innovation. *Journal of Linguistics* 21: 339-84.
- Romaine, Suzan (1982) *Socio-historical Linguistics: Its status and methodology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Trudgill, Peter (2010) *Investigations in Sociohistorical Linguistics: Stories of colonisation and contact*. Cambridge: Cambridge University Press.